

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：31304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02069

研究課題名(和文) 日本古代仏教史上における異言語受容の思想史的研究

研究課題名(英文) The Study of Intellectual History on Accepting Different Language in Ancient Buddhism in Japan

研究代表者

富樫 進 (Togashi, Susumu)

東北福祉大学・教育学部・講師

研究者番号：20571532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、奈良時代から平安時代中期(8～10世紀)に撰述された仏典注釈や論書・説話集といった文献資料を主な対象として、もともとはインドの言語(梵字・悉曇)で記されるべき釈迦の教えを、漢語や和語に翻訳した上で受容することの当否について、仏教発祥の地であるインド、及び数々の高僧が活躍した中国から遠く隔たった日本において、如来や菩薩の教えや救いに与ることの可否について、という二つの側面からの分析・考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、大陸に対する文化的依存からの脱却を目指す平安期の僧侶たちが、ある時は抑えがたい憧憬の念を、またある時は自らの修養が釈迦の遺法に即して行われているか否かという点に対する疑念や不安をもたらす天竺(インド)震旦(中国)という表象に対して、いかなるかたちで対処したのかという諸相を明らかにすることを目標とした。具体的には、日本思想史という専攻分野の特徴・特質を生かし、隣接分野(文学・歴史・美術……)の成果を積極的に採り入れている。特に、2018年度には日本文学の研究者と合同で研究会を開催、その成果を公刊する予定である。

研究成果の概要(英文)：Through this study, I analyzed and considered the following two points, mainly targeting bibliographical materials such as commentary on Buddhist texts and collections of discourses and narratives written from the Nara period to the middle Heian period (8th to 10th centuries),

The first point is whether it is appropriate or not they accept teaching of Buddha, that should be originally written in Sanskrit, written by Chinese characters.

The second point is whether or not they can benefit from Buddha and bodhisattva in Japan; it far from both India; the birthplace of Buddhism, and China where many great monks were active.

研究分野：日本思想史

キーワード：仏教思想 奈良時代 平安時代 三国観

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

一般に、平安期の仏教は唐への留学経験を有する最澄・空海によってひらかれた天台・真言両宗の展開に沿って論じられる傾向にある。時代を経るにつれ、両宗は世俗権力との癒着を強め呪術化を進行させた結果、鎌倉時代に至って民衆救済を旨とする「新仏教」諸宗に主役の座を奪われるに至るという見解は家永三郎・辻善之助・井上光貞らを中心に展開され、日本仏教史展開の一典型例として長らく有力視されていた。しかし、1970年代後半以降は黒田俊雄・平雅行・吉田孝らの批判や提案を受けて、「鎌倉新仏教」の思想的母胎という従属の評価に留まる傾向にあった奈良仏教(南都仏教)・平安仏教の思想的価値を独自に検討する必要が生じるようになった。

具体的には従来「世俗権力との癒着」として一面的かつ否定的に理解されがちであった、仏教教団による 護国国家 鎮護国家 という機能の再評価が中心となるが、近年では中国を中心とした 東アジア文化圏 を構成する諸国家において、僧侶から世俗権力者に対して実施される授戒儀礼や灌頂儀礼が当該圏内における文化的指標と看做されていたという見解が提示されるようになった。このように、護国国家 鎮護国家 という仏教の機能が当時の国際的な文化水準の象徴として、また外交の一媒介として機能していたと考える視点は上川通夫・中林隆之・阿部龍一・河上麻由子らによって様々に発展・展開され、学界で有力視されるようになってきている。

以上の諸成果は、「鎌倉新仏教」という 呪縛 からの解放によって古代仏教独自の意義の明確化に成功するとともに、仏教の 外来思想 たる本質をふまえた議論がなされている点において、それまでの研究に例をみない画期的なものであった。その一方、上記の諸研究はいずれも授戒・灌頂という 儀礼 すなわち形式的側面の継受が主な議論の対象となっており、儀礼 の 抛り所となる 教学 すなわち理論的・思想的側面の継受については必ずしも十分に検討されているとはいえない。「鎌倉新仏教」諸師に関する研究が汗牛充棟ともいえる状況にあるのとは対照的に、最澄・空海を含めた古代仏教思想の体系的研究はいまだ発展の途上にある。特に奈良時代の南都諸学僧、および最澄・空海の後継者らに関する思想的研究は概して低調であり、古代仏教が名実ともに「鎌倉新仏教」から相対化されたかたちで評価されるためには、縦割りの教団史的視点を超越した俯瞰的視点による、理論的・思想的側面からの多面的分析・考察が必要な状況下にあった。

## 2. 研究の目的

研究代表者は本課題の申請時、科学研究費補助金・若手研究(B)「日本古代における戒律思想の展開と発展(課題番号24720034)」を遂行する過程において、天竺出身の密教僧・不空の存在に着目した。不空は仏教発祥の地・天竺の言語である梵語(悉曇)を積極的に用いた密教宣布によって、玄宗をはじめ当時の皇帝から厚い帰依を獲得した僧である。

空海は唐都・長安において悉曇を修得した後、不空の高弟・恵果から胎蔵・金剛両界の灌頂、および伝法灌頂を授けられた。そして、空海によって日本にもたらされた不空伝授の密教は、最澄ら天台一門に対し「仏によって悉曇(梵語)で説かれた真理を、漢語や和語で完璧に授受することが可能なのか」という課題を突きつけることとなる。最澄自身は悉曇を修得できなかったものの、円仁・円珍によって質・量とも空海に匹敵する悉曇の受容・将来が実現すると同時に、仏教東漸史の見直しとその背景たる三国観(天竺 震旦 日本)の具体化が広汎に促された。

さまざまな外来思想を柔軟に採り入れることで成立してきた日本思想史の展開を考えるうえで、仏教を題材に自国文化と外国文化、および中央と地方との間に立ちはだかる 言語 の壁の克服の具体相とその意義を明らかにすることが重要であることは言を俟たない。しかし、管見の限り日本の仏教受容における 異言語 介在の問題に焦点が当たった例は必ずしも多くない。そ

の主な理由として、(1)漢文史料偏重の立場から、漢訳仏典が 翻訳 作業を経ずに中国から受容されてきた経緯が重視されてきたこと (2) 仏教思想の媒体たる文字・言語の受容が 表意 の側面からのみ論じられ、表音 の側面から検討される機会に恵まれなかったこと、の二点を指摘できる。

そこで、本研究においては上記 ・ の問題を明らかにするために、以下の ~ を具体的な目的とした。

これまで各専門分野(国語学・仏教学・日本史学...)にて個別に評価される傾向にあった9世紀の梵語(悉曇)受容の意義について、俯瞰的・総合的視点からの再評価を試みる。

上記 の成果をふまえて、当該期の異言語間における思想的言説伝播構造の一般化を図る。

仏教的真理獲得および仏教的世界観構築の具体相を 異言語 受容という側面から分析することで、教学・政治思想とは異なる思想史的立場から当該期の仏教文化受容の意義を提示する。

### 3. 研究の方法

本研究では、密教伝授を目指して9世紀初頭～前半期に渡唐した留学僧たちの言語意識、およびその背後に存在する世界観を明らかにすることを目指した。具体的には、当該期に著された仏教関係の文献史料を主な題材に選び、隣接諸分野の研究成果も積極的に採り入れたかたちでの考察・分析を心がけた。

### 4. 研究成果

本研究は当初、先の研究課題(「日本古代における戒律思想の展開と発展」上述)で明らかになった内容をさらに発展・進化させつつ、最澄以降の天台僧(および、天台僧の影響を受けた在家信者)によって、悉曇による思想・文化受容を支える言語意識や、その背景となる世界観を明らかにする目的を有していた。しかし、研究を進めていく過程において、天竺由来の釈迦・如来・菩薩によって語られた(とされる)言説を日本人僧がいかに受容するか(仏菩薩 日本人僧)というベクトルだけではなく、日本人僧が自らの実践を以て天竺由来の釈迦・如来・菩薩へといかに主体的にアプローチしていくか(日本人僧 仏菩薩)というベクトルについても視野に入れる必要があることに思い至り、申請当初の目的・計画を一部変更することとなった。

本研究によって明らかにすることのできた主な内容を、以下に列記する。

- (1) 既に述べたように、空海によってもたらされた不空の密教思想は、彼に先行して灌頂を授けられた最澄に対しても大きな影響を与えた。その意義については従来、自身の相承系図に(本来は存在しなかったはずの)不空の名を追記した事実象徴されるように、ややもすると皮相的・非本質的なものとして否定的に評価される傾向にある。そのような見解に対し、本研究では最澄撰述の『仁王会式』『仁王儀軌』に分析を加え、最澄による新訳『仁王経』受容は、若年期より晩年へと至るまで一貫した護国思想に沿ったかたちで、極めて自覚的に行われた。最澄の新訳『仁王経』受容は『仁王儀軌』『良賁疏』の内容を前提としており、その成果は『仁王会式』にて初めて具現化した。『仁王会式』に準拠すると考えられる同九年の『仁王経』長講の成功は『山家学生式』『顕戒論』に結実する大乘菩薩僧育成構想の体系化を促進した。最澄は『仁王経』に《天竺由来の呪術的側面》《南都とのコンセンサスの側面》という二側面を見出し、目的に応じて新旧両訳を併用した。最澄は新訳『仁王経』と遮那業担当の密教経典とを区別しており、中国護国仏

教史および《不空教学》の体系内で新訳『仁王経』の占める位置を一定程度理解していた、という五点を論証した。

- (2) 円仁『入唐求法巡礼行記(以下『行記』)』は、承和5年(838)から同14年(847)までの足かけ十年に及ぶ巡礼行の記録である。『行記』は、帰国後一定の時間を経過した段階で円仁自身の手による加除訂正が行われているとみられるものの、巡礼遍歴および円仁の言動については大幅な変更が行われた形跡は認められない。円仁は入唐以前、天台止観行の実践者として一定の評価を獲得しており、入唐留学の目的も天台山における天台教学の研鑽であったにも関わらず、最終的に首都・長安において本格的な密教教学の修得を果たして帰国している。本研究では、唐における円仁の修学目的が天台教学から密教へと変化し得た要因として、五臺山における文殊感見体験と、その巡礼過程における夢見体験とに着目した。円仁の師・最澄は晩年の著作『顕戒論』において、文殊信仰を媒介として、自身の提唱する大乘菩薩戒を末法相應の戒律として宣揚した。最澄の主張において文殊とは、行者に対して滅罪・成仏を保証する存在であった。さらに、『文殊師利般涅槃経』では、乱心の行者であっても夢中で文殊に値遇することで、不退転の境地へと導かれることが明記される。巡礼過程における再三の夢見体験、および五臺山での文殊感見体験によって、円仁は自らの巡礼行の妥当性を再認識し、長安における密教修学に専念することができたものと考えられる。

- (3) 本研究では、上記(2)において円仁の巡礼行に大きな影響を与えることとなった文殊信仰に着目し、文殊を行基の化身と見なす「行基文殊化身説」の展開について、古代から中世までの展開を素描することとした。

奈良時代の僧・行基(668-749)は、民衆や豪族を対象に幅広く布教活動を行う一方、東大寺の盧舎那仏造営に大きく貢献し、朝野を通じて幅広い尊崇を集めた。その結果、行基は生前から大徳菩薩と称されるのみならず、死後ほどなく文殊の化身と見なされるようになった。彼の活躍を描く説話は、古代から中近世を通じて、膨大なバリエーションを生み出していく。

行基が文殊の化身と見なされるようになった理由は、一般に、困窮者の救済を目的とした布施屋の建立や運営、弟子の私度僧集団を動員しての地溝の造設や架橋といった行基の諸事績が、『文殊師利般涅槃経』の行基像と結び合わされた点に求められる。この通説に対して本発表では、行基即文殊説を最も早い段階で唱える景戒『日本霊異記』(820年代成立)や一向大乘寺の食堂上座に文殊像を設置すべきと主張した最澄『顕戒論』(819成立)が、いずれも滅罪を司る文殊のイメージをより重視した点に着目する。

滅罪・懺悔の対象としての文殊像と社会福祉的利他行の実践者としての文殊像はいずれも『文殊師利般涅槃経』に認められ、両者は矛盾・背反する要素ではない。しかし、上に示した事実は、在世時から没後間もない段階においてはどちらかという滅罪・懺悔の対象としてとらえられていた行基像が、源為憲によって『三宝絵』が著された10世紀末~11世紀初頭あたりを画期として、徐々に社会福祉的利他行の担い手という色彩を強めていったことを示しており、古代から中世を通じて、行基(および文殊)のイメージが緩やかな変容を遂げていったことを示唆するものと考えられる。

- (4) 興味・関心を共有する研究者と討議し、問題のさらなる進化・発展を目的として、共同研究会「日本古代仏教史上における仏典註釈の諸相」を開催した(2019年3月9日~11日。於、東北福祉大学仙台駅東口キャンパス)。本研究会の成果については、日本思想史懇話会(編)『季刊日本思想史』誌上にて、2020年度中の公刊を予定している。

上記(1)～(3)の成果については、研究代表者の専攻分野である日本思想史において必ずしも十分な研究がなされていない最澄・円仁、さらには『日本霊異記』『三宝絵』といった仏教説話集などを題材に、日本人僧が自らの実践を以て天竺由来の釈迦・如来・菩薩へといかに主体的にアプローチしていったのかという点を具体的なかたちで明確化することができ、隣接分野に対しても一定度の貢献をなし得る成果であると考えている。その反面、申請当初に計画していた「異言語 受容という側面における、仏教的真理獲得および仏教的世界観構築の具体相」については手薄になってしまった感がある。また、(1)～(3)の諸成果を総合的・体系的に整理する視点も必要であり、今後さらに精査・検討の必要があると考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 富樫進	4. 巻 58
2. 論文標題 文殊信仰をめぐる行基菩薩像形成史 『日本霊異記』を起点として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代文学	6. 最初と最後の頁 22 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 富樫進	4. 巻 51
2. 論文標題 古代から中世へ 行基像の変容とその思想的意味	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本思想史学	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富樫進	4. 巻 15
2. 論文標題 文殊の導く求法巡礼 円仁の 夢 観念をめぐる	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本仏教総合研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富樫進	4. 巻 119-3
2. 論文標題 〔書評〕大塚千紗子著『日本霊異記の罪業と救済の形象』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富樫進	4. 巻 48
2. 論文標題 最澄における『仁王経』受容の意義 不空教学と大乘菩薩戒構想との関係を視野に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本思想史学	6. 最初と最後の頁 81-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 富樫進
2. 発表標題 古代から中世へ 行基像の変容とその思想的意味
3. 学会等名 日本思想史学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 富樫進
2. 発表標題 文殊信仰をめぐる行基菩薩像形成史 『日本霊異記』を起点として
3. 学会等名 古代文学会2018年シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 富樫進
2. 発表標題 『入唐求法巡礼行記』における夢
3. 学会等名 日本宗教史懇話会2016年度サマーセミナー (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 富樫進
2. 発表標題 最澄における不空受容
3. 学会等名 日本史研究会第43回古代史サマーセミナー（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 富樫進
2. 発表標題 梵鐘がひらく時空 日本古代を中心に
3. 学会等名 空間史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 富樫進
2. 発表標題 『入唐求法巡礼行記』における夢（仮題）
3. 学会等名 日本宗教史懇話会2016年度サマーセミナー（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日本思想史学会（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数
3. 書名 日本思想史学会五十周年記念論集（仮題）	



1. 著者名 藏中しのぶ (編)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 557
3. 書名 『古代文学と隣接諸学2 古代の文学とネットワーク』	

1. 著者名 日本思想史事典編集委員会 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版株式会社	5. 総ページ数 718
3. 書名 『日本思想史事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----